

議論を重ねた後、ペトロが立って言った。「兄弟の皆さん、ご存じのとおり、ずっと以前に、神は、あなたがたの間で私をお選びになりました。それは、異邦人が私の口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。人の心をお見通しになる神は、私たちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らを受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、私たちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖も私たちも負いきれなかった轡を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」（使徒 15:7～11）

二人が話を終わるとヤコブが答えた。「兄弟の皆さん、聞いてください。……それで、私はこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません。ただ、偶像に供えて汚れた物と、淫らな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにと、手紙を書くべきです。モーセの律法は、昔からどの町にも告げ知らせる人がいて、安息日ごとに会堂で読まれているからです。」（使徒 15:13、15:19～21）

著者ルカは、パウロの第一回宣教旅行と第二回宣教旅行の間に、エルサレムの使徒会議について書いている。使徒会議は紀元後48年に、異邦人伝道をめぐって、エルサレムで持たれた最初の教会会議で、キリスト教史において、最も重要な会議であったと位置づけられる。使徒会議の成功が、パウロの異邦人宣教を大きく展開させたからである。

ユダヤ（エルサレム教会）からアンティオキアに下って来た人々が、主イエスへの信仰に入った異邦人たちに、「モーセの律法に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教える事態が起こった。パウロ、バルナバと、その人たちとの間で激しい対立が起き、論争が交わされた。しかし、この件について、論争では解決を得ることはできなかった。エルサレム教会の使徒や長老たちと協議しなければならないと考えた。二人は、自分たちが説いた福音信仰がユダヤ教の伝統に縛られることによって、福音が空虚になることを恐れ、数人の者と共に、エルサレムに向かった。一行は、教会の人々から送り出され、フェニキアとサマリア地方を通り、点在する諸教会に立ち寄り、異邦人たちが改宗した次第を詳しく伝え、教会員たちを大いに喜ばせた。

エルサレム教会に到着すると、使徒や長老たちに歓迎され、パウロとバルナバは、神が共にいて行われた宣教の様子を報告した。当然、異邦人たちが主イエスを信じ、洗礼を受けたことも語った。すると、律法厳守を説くファリサイ派から信者になった人々が数名立ち上がって、「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ」と発言した。彼らは、主イエスを信じる信仰に改宗したのであるが、ファリサイ派の伝統的教義に固執して、神の民の徴である割礼を受け、モーセの律法を守らせ、そのことにおいて救いは全きものとなると主張したのである。これは、パウロとバルナバが説いた福音とは全く異なる。二人は、ユダヤ教の信仰と伝統から解放された福音信仰を守り抜くためにエルサレムに来たのである。使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まり、歴史的なエルサレムの使徒会議が始まった。二人の福音理解とユダヤ教の教義に縛られた人々の間で激論が交わされた。ユダヤ教的イエス信者は下記のように主張した。彼らは、エルサレム教会の無私な愛に生きる群れに感動した。それは、主イエスへの信仰

が生み出すものと思ひ、改宗したのであろう。しかし、長年、培われてきたファリサイ派の信仰と伝統は身に沁みついていた。また、神の民を自負するユダヤ教徒は民族を形成した律法に対し強い誇りを持っていた。主イエスへの信仰によって、救われるのではあるが、やはり、割礼を受け、モーセの律法を守ることによって、完全な救いに与ると言い張った。

一方のパウロとバルナバの福音信仰について、著者ルカは、使徒言行録13章38節～39節で、「だから、兄弟たち、この方（主イエス）による罪の赦しが告げ知らされたことを知っていただきたい。そして、モーセの律法では義とされえなかったあらゆることから解放され、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」と書いている。パウロは、ガラテヤ書で「信仰義認」を力説している。「しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです（2:16）」と、律法を守ることによって義に至らず、キリストの真実（十字架と復活）によって義をいただける。また「キリスト・イエスにあっては、割礼の有無は問題ではなく、愛によって働く信仰こそが大事です（5:6）」と、割礼の有無は救いに関わりないと語っている。両者の間で激論が交わされた。

すると、ペトロが立ち上がり「兄弟の皆さん、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間で私をお選びになりました」と口を開いた。そして、異邦人が私の口から福音の言葉を聞いて信じた。神は異邦人にも聖霊を与えて、清い者とされ、ユダヤ人と異邦人の間に何の差別もなさらなかった。「それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖も私たちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」と締めくくった。律法厳守を強要する軛は、先祖もユダヤ人も負いきれなかった。その軛を異邦人に負わせることはできない、行いではなく恵みによって救われると語った。全会衆は静かになり、パウロとバルナバが自分たちの宣教を通して、異邦人の間で行われた赦しと不思議な業について話すのを聞いた。すると、エルサレム教会の重鎮になっていた主イエスの弟ヤコブが「兄弟の皆さん、聞いてください」と話し始めた。異邦人の中から信じる民を選び出された次第はシメオン（ペトロのヘブライ名）が話してくれた。そして、預言者アモスの言葉を「私の名で呼ばれるすべての異邦人が / 主を求めようになるためである」と言い換え、異邦人も主を求めていることを認めた。ヤコブは「神に立ち帰る異邦人を悩ませてはならない」と、律法厳守を強要し、異邦人を苦しめてはならないと結論づけた。ペトロとヤコブの発言によって、パウロたちの説く「信仰義認」の教理が認められ、互いに手を取り合い、了解し合った。ただし、偶像に供えて汚れた物と、淫らな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにというユダヤ教の戒律が条件に付け加えられた。

パウロはガラテヤ書で、共通の福音理解ができたことを喜び、自分たちは異邦人宣教へ、エルサレム教会員は割礼を受けた人々の宣教に向かうと決めたと書いている。そして、ユダヤ教的条件は無視したかのように「貧しい人たちを顧みるように」との条件があったとだけ記している。このエルサレムの使徒会議で、パウロたちの主張が受け入れられ、異邦人宣教が大きく開かれた。